

称号及び氏名	博士(社会福祉学) 金 春男(キム・チュンナム)
学位授与の日付	平成20年3月31日
論文名	「異文化に配慮した在日コリアン認知症高齢者の生活支援 — バイリンガル話者の特徴に着目して —」 Supports for Korean elderly persons with dementia living in Japan from cross-cultural perspectives — Focused on the characteristic of bilingual speakers —
論文審査委員	主査 黒田 研二 副査 三野 善央 副査 兎島 亜紀子

論文要旨

本研究では、バイリンガル話者の特徴に着目し、在日コリアン認知症高齢者を対象とした母国語による個人回想法をこころみた。その目的は、異文化に配慮した母国語による個人回想法を通して、認知症高齢者とのより有効なコミュニケーションの可能性を検討することである。

本研究の意義としては、二つあげられる。一つは認知症高齢者との有効なコミュニケーションの可能性を提示したことである。老人ホーム等においては、入所者にとって身近な存在であり、高齢者と日常生活行動の中で言語コミュニケーションを取ることが多いケアワーカーとの母国語を用いた個人回想法による会話は、バイリンガル話者の特徴を踏まえた一つの支援になるだろう。本研究の母国語による回想法のこころみでの協力者は4人ともにHDS-R(改正長谷川式簡易知能評価スケール)の評価点では10点以下を示し、いずれも日常生活行動全般に部分介助か全面介助が必要な人々である。これらの人と一定の話題を用いて、約30分程度のまとまったコミュニケーションを行い、そこから認知症高齢者との有効なコミュニケーションの条件を導いたことにおいて意義があったと考える。

二つはバイリンガル話者の特徴を肯定的にとらえて研究を行ったことである。話者は二つの異なる言語を使うことによって、話題導入、話題転換、引用、伝達内容の強調など談話における特定の効果をもたらす。このような多種のコード切り替え(Code-Switching; CS、二つの言語を併用する話者が、二つのコードをさまざまな要因に応じて切り替えることを言う)を含んだ談話を、話者に内在している会話スタイルの一つとして認める必要があるだろう。バイリンガル話者は、認知症になっても、CSを用いる能力をコミュニケーションの潜在的な能力として発揮できるのではないだろうか。そうであるなら、本研究においてバイリンガル話者の特徴を、肯定的かつ積極的にとらえることが意義を持つと考える。

以上の目的や意義を有する研究の研究方法として、大きく2つのアプローチを採用した。在日

コリアン認知症高齢者への理解をより深めるために、実際に在日コリアン認知症高齢者の介護に携わっているケアワーカーたちへのフォーカス・グループインタビュー調査を実施した。さらに、在日コリアン認知症高齢者の協力に基づいて、異文化に配慮した母国語による個人回想法を用いた。それらの結果をもとに今後の在日コリアン認知症高齢者とのより有効なコミュニケーションの方法を模索した。

本研究の各章の概要は、以下の通りである。

第1章「バイリンガルの在日コリアン認知症の理解」では、認知症と認知症高齢者のケアにおいて、ケアと言葉の視点から認知症高齢者とのコミュニケーションについて論述した。特に、社会言語学における言語行動のとらえ方から、バイリンガルの話者である在日コリアン認知症高齢者(主に一世)の言語生活と、認知症をもつ人とのコミュニケーションの方法としての回想法の有効性と応用の可能性について考察した。

バイリンガル話者の特徴およびバイリンガルの在日コリアン認知症高齢者(主に一世)の言語生活をまとめると以下のとおりである。①バイリンガル話者には、バイリンガルのスピーチパターンの特徴より、コード切り替え(Code-Switching; CS)の現象がみられる。そのCSの要因としては、話者の言語能力不足による否定的な側面以外に、相手への配慮として一方の言葉を用いる、新たな話題の導入および転換、引用部分の明示や伝達内容の強調、一方の言語に適当な単語がないのを補って別の言語を取り入れるなど、談話において特定の効果をもたらす。バイリンガルというのは、たんに二つの言語が話せる、読めるというだけではなく、発想、生活の価値観などにいたるまで二つの言語文化を身につけていることを意味する。②バイリンガル話者には、個人的にごく親しい関係でうちとけて話をする場合に、個人的な願望、よろこび、かなしみなどの表現で、むしろ母語のことが自然に出てくる傾向がある。③来日した一世(old comer; 1910~1945年前後に来日した人たちとその子孫)の多くは来日してから自然習得によって日本語を身につけた。学習ではなく自然習得によって日本語を学んだ一世は、学びきれなかった日本語を彼らの母語である韓国語に置き換えて使用し、また、日本語と混用したユニークな混用コードを使用している。

認知症をもつ人の中核症状といわれる認知障害そのものを改善することは、現在のところ、困難である。しかし、周辺症状は、周囲の環境次第で変化しうる。ケアを担っている人が、その行動の背後にある認知症高齢者からの発信を、あらゆる場面のコミュニケーションを通じて理解することにより、行動障害ではなくなるのである。認知症をもつ人とのコミュニケーションの方法としての回想法は、自然で普遍的なプロセスである高齢者の過去への回想に対する積極的なとらえ方から発展した。その回想法は、専門家が共感・受容的姿勢をもって意図的に介入することを通じて、高齢者の心理的安定や高齢期における自我の統合が促進されたと考えた。その後、回想法は、精神科医や臨床心理の専門家だけではなく、高齢者看護や介護に関連するさまざまな職種によって、展開され、現在、認知症ケアを担っている人々が用いる重要なアプローチの一つとなっている。

第2章「在日コリアン認知症高齢者に対するケアワーカーの認識」では、6人のケアワーカー(在日コリアン向けの特別養護老人ホーム勤務)を対象としたフォーカス・グループインタビューを用いた調査結果について論述した。

ケアワーカーたちは、「身体介護」においては、在日コリアン認知症高齢者と日本人に対する対応の違いはないと考えている。だが、「在日コリアン高齢者の特徴」を、ケアワーカーたちは身を持って感じていることが分かった。つまり、認知症になっても民族性が個性として発揮されるので、個

性を尊重した介護がますます重要であることが示されたと言える。異文化に暮らす人々の最大の問題は、コミュニケーション、つまり言葉の問題である。今回、ケアワーカーたちへのインタビュー調査の結果からも、バイリンガル話者の特徴を持つ在日コリアン認知症高齢者の生活支援において、言葉の問題があることが明らかになった。バイリンガル話者である在日コリアン高齢者たちは、言いたいことが誤解されるよりも、自分の思いを適切に伝えられないという典型的な問題をかかえている。バイリンガル話者である在日コリアンとしての彼らの個性を尊重することが、彼らをより理解することにつながると考えられる。

第3章「母国語を用いた個人回想法による会話のこころみ」では、異文化をもつバイリンガル話者である認知症高齢者をより理解できるコミュニケーションの条件について、母国語を用いた回想法による会話をもとに考察した。

会話は、在日コリアン向けの特別養護老人ホームに入居中で中等度又は重度の認知症をもつバイリンガル高齢者4人(すべて女性、平均88歳)の協力のもとに行った。母国語と日本語の場面において、個人回想法による会話内容や感情表出に差が生じるかという視点から両場面の比較分析を行った。両場面の会話分析とコード切り替え(CS)、表情観察(ERIC感情反応評価尺度)の結果をまとめると以下のとおりである。①重度の認知症であってもバイリンガル話者の特徴である自然なコード切り替え(CS)が現れることが明らかになった。②認知症をもつバイリンガル話者には、過去の学習や経験により蓄積された母国の言語形式を使う機能が残存能力として、潜在していることが確認できた。③両言語の場面において、それぞれ叙述的回想(自伝的な物語)類型が多く、来日前の昔の出来事、個々人のユニークな思い出が多く語られた。④母国での日本語学習経験の有無(来日前)・家庭や周辺の言語環境(来日後、母国語の使用度)などの言語使用の背景によって、両言語による表現には個人差が見られた。⑤ERIC感情反応評価尺度を用いて観察した結果、協力者4人とも、日本語の場面より、母国語の場面において肯定的感情表現の得点が高くなる傾向がみられた。

論理的な言語表現ができない重度認知症の人であっても、部分部分では、自分の気持ちを表現することができる。その自己表現のチャンスとなるのが回想法である。回想法は、高齢者の個性(例えば、在日コリアン認知症高齢者の場合は、バイリンガル話者としての特徴など)に配慮することにより、比較的保たれている遠隔記憶や手続き記憶を活かせることから、認知症高齢者がより豊かな生活を営むための支援として有効なアプローチのひとつになると考えられる。

第4章「在日コリアン認知症高齢者との有効なコミュニケーション」では、2章と3章の分析結果を基に、今日の認知症高齢者のケアの実践において在日コリアン認知症高齢者とのより効果的なコミュニケーションの方法について、以下の三つに焦点化し、考察した。

1. 個性を尊重しつつ在日コリアン認知症高齢者に母国語を用いて過去の生活や体験を聞いたときに、思い出を語る彼らの会話のなかには、バイリンガル話者の特徴であるコード切り替え(CS)が顕著に見られた。バイリンガル話者のコード切り替え(CS)は、彼らにとっての独立した一つの気楽な言語スタイルであり、彼らだけの固有スタイルだといえる。だから認知症になってもそのスタイルが存続しているのである。そのようなスタイルを重んじることこそ、個性を尊重するコミュニケーションの実践につながると考えられる。

2. バイリンガル話者である認知症高齢者にとっての母国語の重要な役割を考えると、母国語を用いた回想法による会話は、何気なく出てくる喜怒哀楽の感情表出を促すという点と、個人的な願望や要求などの自己アピールをより自由にできるようにするという点で有効である。認知症高齢

者には比較的よく保たれている遠隔記憶や手続き記憶を活かせることから、回想法は、彼らとのコミュニケーションのひとつとして有効なアプローチとなる。なお、母国語を用いた回想法は、在日コリアン高齢者に限らず、他のバイリンガル話者の高齢者にも、ありのままの自分を保ちながら、気楽に話せる会話として応用できるだろう。

3. 老人ホームなどの日常生活活動としての応用可能性について考察した。在日コリアン高齢者の過去の生活や体験について母国語を用いた会話をするならば、彼らの言語を完全に理解して会話をするのがベストだろう。しかし逆に、言葉を知らなくても寄り添って、高齢者から習った言葉を次の会話で使うことで、高齢者は、覚えてくれたのだと嬉しく思うこともあるはずだ。そのような経験が重なることで会話が続いていくことになるのであろう。その上、彼らの言語を話すボランティア(韓国の実習生、在日留学生、二世、三世など)の活用が適切に加わると、老人ホームの入居者にとっても日常生活のなかの楽しいひと時が増えることになる。

本研究は4人の事例を30分ずつ、2回(母国語と日本語のセッション)、合計16セッションの母国語を用いた個人回想法による会話を比較分析した事例研究であり、事例数が少ないことから、一般化するには限界があると思われる。今後事例の数を増やし、分析を加えることも必要であろう。また、個人回想法だけではなく、グループ回想法による入居者同士の交流を促進する研究も求められる。

学位論文審査結果の要旨

認知症のケアには、この20年ほどの間に新たな取り組みが認められるようになった。脳の不可逆的な障害とそれにとまなう知的機能の低下という悲観的な見方を乗り越えて、人間としての体験そのものに寄り添い、それを理解していこうとする試みである。そこでは、パーソンフッド(personhood)すなわち「その人らしさ」を尊重しつつ、認知機能の低下にとまどい、それに抗し、あるいはそれを受け入れながら生きていこうとしている、認知症の人の体験そのものに寄り添っていくケアのあり方が模索されてきた。

こうした立場からのケアにおいて、認知症の人が、若いころからの生活の中で身につけた固有の生活体験は重要な意味をもつ。その人の生きてきた歴史を、言語的、文化的背景とともに理解することと、そのためのコミュニケーションは、ケアの質を規定する重要な要素ともなる。

本論文は、2つの国の言語文化を身につけている認知症高齢者への適切なケアが成立する条件について検討した意欲作である。認知症高齢者をケアするにあたり、彼ら・彼女らといかにコミュニケーションを図っていくかということは大きな課題である。著者は、本論文の第2章で在日コリアンの認知症高齢者をケアしているケアワーカーらにグループインタビューを行い、その結果、ケアワーカーらが在日コリアン高齢者の「母国語」を理解できず、コミュニケーションに困難を感じている事実を浮かび上がらせる。著者は、「言語問題」が在日コリアン高齢者の生活支援にとって重要な課題であることを明らかにし、かかる「言語問題」に配慮した認知症ケアの試みとして、第3章において在日コリアン認知症高齢者に対し、母国語による個人回想法を行っている。

会話の内容分析、母国語と日本語の場面の比較を通して、第4章では、母国語を用いた回想法の会話が、在日コリアンの認知症高齢者にとって豊かな自己表現を実現する支援として有効で

あると結論づけている。著者の論じ方は説得的であり、バイリンガルの認知症高齢者に対する支援のありようを考える上で、本研究は重要な示唆を与えるものであると評価できる。

本論文の優れている点は、なんといってもテーマの斬新さ、おもしろさにある。バイリンガルの認知症高齢者に向けた支援のありようを分析した本研究は、本論文の著者でなければなしえなかったものであろう。文化的他者に対する支援については、欧米のソーシャルワークではすでに論議されているが、わが国においても異文化に配慮した支援を考えることは重要であると考えられ、その点においても、大変意義のある研究であると評価できる。

著者は、母国語と日本語の場面を比較した回想法の分析から、重度の認知症であってもバイリンガル話者の特徴である自然なコード切り替え(CS)が現れること、母国での日本語学習経験の有無や家庭や周辺の言語環境など言語使用の背景によって、両言語による表現には個人差が見られること、日本語の場面より母国語の場面において肯定的感情表現の得点が高くなることを見出している。こうした知見は本研究により新たに見出されたものであり、高く評価できる点である。著者は、この「母国語を用いた回想法による試み」の報告により、日本認知症ケア学会から平成19年度石崎賞を受賞した。優れた実践であることを、評価されたものである。

総合的にみて、本論文は博士論文としての水準に達していると判断する。